

## 教師教育における記号論の重要性

齋藤 俊則

日本教育大学院大学 学校教育研究科

t-saito@kyoiku-u.jp

本論では筆者自身の教育実践の体験をふまえて教師教育における記号論の重要性を議論する。近年、情報通信技術の浸透を背景に、構成主義に代表される新しい学習観に立つ教育へのニーズが高まっている。このような新しい教育を実現するためには、まずは教師自身が従来の客観主義的学習観を乗り越えて構成主義的学習観を持たなければならないが、これは価値観、世界観の根幹に関わる問題であり、表面的な学習だけでは無理である。記号論は客観主義の前提を乗り越え新たな教育観を獲得するための有力な“入り口”を提供する。

### The Importance of Semiotics in Teacher Education

Toshinori SAITO

Professional Program of School Education

Japan Professional School of Education

This paper discusses the importance of semiotics in teacher education according to educational practices that author has experienced. Needs of education arises today, which is based on new concept of learning represented by constructivism. To realize this kind of new concept based education, educators are firstly required to overcome their view of learning as objectivists and to acquire the view as constructivists. However, superficial approach is not enough to fulfill this requirement because problem of view of learning depends on problem of one's basis that is related to the sense of value or the outlook of the world. Semiotics offers effective “entrance” to overcome objectivists' premise and to acquire new kind of viewpoint about learning.

#### 1. はじめに

近年構成主義 (constructivism) の学習観に立つ教育への注目が高まっている。構成主義は「<現実 (リアリティ)>は社会的に構成される」[1]とする立場である。この立場を前提とする教育においては、知識とは学習者による他者への積極的な働きかけの結果得られるものであり、かつその内容は学習者の置かれるコンテキスト (学習者の属する共同体において有力な価値観、働きかけの場面における学習者のポジション等) に応じて変化するものとされる。

構成主義が注目される背景の一つとして社会の情報化による教育へのニーズの変化が挙げられる。かつて工業化社会においては均質な労働力を大量に育成する観点から客観主義 (objectivism) に基づく教育—知識とは人間から独立した客観世界に実在するものであり、学習とは客観世界の知識を学習者の内部にできるだけ忠実に転移する行為である等—が機能した。しかし情報通信技術 (ICT; Information and Communication Technology) の浸透によって形式化可能な単純労働は

コンピュータが担うようになると、人間には複雑で形式化の難しい、より高度な労働が期待されるようになる。このような労働を担う人材の育成には学習の主体性が問われる構成主義的な教育がより適していると考えられる。

構成主義的教育を実現するためには、まずは教師自身が客観主義を乗り越えて構成主義的教育観を持たなければならない。しかし客観主義を当然のこととして受け入れてきた多くの教師(ないしは教師候補の学生)にとってこれは容易ではない。なぜなら学習観の問題は、表面的な技術論や道具の問題を超えて、その持ち主の価値観や世界観の根幹に関わる問題だからである。

筆者は構成主義的な学習観を獲得するための“入り口”として記号論が適していると考え、記号論は記号—すなわち「何かを意味する何か」であり「人が意味を見いだすあらゆるもの」—という概念を媒介に、“素朴な客観主義”に立つ日常的な言語観を見直すことを通して、意味世界の成り立ちの根幹にある諸要因 (コード、コンテキスト、コードやコンテキストの背景にある社会や共同体の力等) を探究する学問である。

記号論から得られる言語観は、知識の価値中立性や客観性を相対化する構成主義的学習観と親和性が高い。

本論では構成主義的な学習観の獲得を目指す教師教育において記号論を学ぶことの重要性を議論する。加えて、記号論が情報生産に重きを置く情報教育との組み合わせによって実践的知識として生かされる可能性があることを指摘し、実際に筆者が携わる教師教育の実践の概要を述べる。

## 2. 構成主義の“入り口”としての記号論

記号論において“読む”という行為は能動的な行為として描かれる。仮に読む行為を客観主義的に、すなわち対象にあらかじめ内蔵される意味を読み手の頭の中に転移する（あるいは再生する）行為と捉えるならば、それはきわめて受動的な行為として描かれる。しかし記号論において読む行為とは、むしろ読み手が積極的に世界から意味のある部分を切り出す行為（“分節”と呼ぶ）である。記号論では、記号現象（何かをそれを読み取る人に意味を発する現象）は読み手の関与によって初めて成立すると考える。何かの意味を持つ“表現”であるのは、読み手がそう考える限りにおいてである。

ただし読み手は自由に世界を分節できるわけではない。記号論において分節は、読み手の属する共同体のコミュニケーションコードや読む行為が行われる際の様々な脈絡（コンテキスト）に左右されると考えられる。したがって読み手の主体性は所与の前提ではなく、コードやコンテキストとの関係を視野に入れることで成立する現象として捉えられる。

記号論の導く上述の認識は構成主義的な学習観を理解する上での一つの有力な“入り口”を提供する。すなわち記号論の分節の考え方や読み手とコード、コンテキストとの関係性に対する捉え方は、構成主義が知識の獲得過程の能動性や共同性を強調し、かつ得られる知識と学習者の価値観との関係を重視する点の真意を理解する上での前提をなしえる。学問上の位置づけからすれば、記号論が構成主義を基礎づける唯一の哲学であるというわけではない。しかし筆者は記号論を入り口とすることで、構成主義的学習観を理解し、その主要な部分を演繹的に再構成することが可能であると考える。

## 3. 教師教育における記号論

記号論の学習はできるだけ早期に行うのが望ましい。なぜなら記号論を学ぶことの意味の大半は客観主義の

諸前提を相対化する視点を獲得する点にあるからである。この“新しい視点の獲得”とは、とりわけ客観主義的な学習観を所与の前提として育ててきた人にとっては、価値観の大きな転換そのものであると推測する。そのような体験は価値観が確立される前の若い段階の方が起こりやすい。したがって、本来ならば自我の確立の途上である中等教育段階で学ぶことが理想的であるとする。しかし残念ながらわが国の中等教育に表立って記号論を学ぶカリキュラムは存在しない。

このような事情から、教師候補者が実際に記号論を学ぶ機会は、わが国においては大学学部段階であると考えるのが現実的である。その意味で、筆者は大学の教職課程に記号論を組み込むべきであるとする。実際に大学や学部によっては専門課程の前段階の科目の中に記号論を設置している場合もある。しかしその大半は選択科目であり、大多数の教師候補者は記号論を学ばずに教職免許を得ている。

さらに筆者は大学学部に加えて、大学院レベルでの教師教育において記号論的認識論およびその応用としての構成主義的学習観を実践的に鍛える機会を設けるべきであるとする。わが国では2006年度に教師育成を主旨とする専門職大学院が開校し、さらに2008年度からは教職大学院制度がスタートする。これらの教育機関が設立された背景には、教師を育てる上で従来の大学学部の教師教育のみでは不十分であるとの認識がある。大学院の段階においては、学部時代に得た知識・技法の運用と評価を通して、教師としてのキャリアを通じて基礎となる教育観ないしは教育哲学を涵養することが望ましい。その観点からすれば、学部時代に記号論を初めて学んだ教師候補が構成主義的な学習観へと認識を発展的に深める期間として、大学院の期間は非常に重要であるといえる。

## 4. 記号論をいかに学ぶか

### 4.1 記号論の一般的な学び方

記号論の学び方は入門書等の文献の読解に加えて、講義の受講、テキスト分析などの演習、さらに状況が許すならば他の学習者との議論によるのが一般的である。入門書としては池上によるもの[2]や丸山によるもの[3]、やや高度であるがエコによるもの[4]等が有名である。これらは人文科学の入門書として定評があるものであり、きちんと読了できれば記号論に対する基本理解は形成できる。加えて人文科学系の教育の専門家がいない場合には、講義、演習、議論の場の設定も可能であろう。

ただしこれまで記号論の教育は、少なくともわが国

においては、あくまで人文科学分野の基礎教育として捉えられてきた。そのため、入門書の書き方や内容、講義や演習の仕方などに関しては、多くの場合“人文科学分野の専門家教育の入門編”という前提が無意識のうちに取られてきたように思われる。記号論を教師教育の中に位置づけるためには、上述の“人文科学分野の専門家教育の入門編”という視点からの教育を見直す必要がある。すなわち学習内容の整理や学習順序の確立といった点に見直しの余地が多くある。

#### 4.2 情報教育としての記号論

たとえば筆者が執筆したメディア・リテラシーの入門書[5]では一般大学生向けにアレンジした記号論入門カリキュラムと記号論を応用したメディア読解の方法を示した。この文献では最初に記号論入門の章を独立して設けた上で、その後の章で具体的な題材（たとえば雑誌広告など）を用いたテキスト分析事例を示し、記号論に対する理解を読解の技術に結びつけられるように配慮した。記号論入門の章ではできるだけ幅広い層の読者が読めるように記号論の基本概念を最小限に絞り込み（言及したのは記号、コード、コンテキスト、分節、記号表現/記号内容、差異、恣意性、示唆的特徴など）、可能な限り平易な表現による説明に努めた。

また筆者は情報教育の一環として記号論を位置づけることを念頭において、一般大学生がメディアの記号論的読解を実践するための4つの学習段階から成る教育方法を提案した[6]。4つの学習段階は「第1段階：記号概念の理解」に始まり「第2段階：送り手とメディアテキスト（読解対象となるメディア上の表現）の関係に注目した読解」「第3段階：読み手とメディアテキストの関係に注目した読解」と進み最後に「第4段階：読み手としての自己の価値観の相対化」で終わる。

それぞれの段階の概要は次の通りである。第1段階では上述入門書[5]の記号論入門の章とほぼ同内容で記号概念の基本的理解を形成する。第2段階ではいかなるメディアテキストも送り手による分節を経て構成されたものであり、いかに客観性を装おうともそこには送り手のコードとそれを取り巻くコンテキストの影響が反映されることを学ぶ。第3段階ではメディアテキストから読み手が読み取る意味に注目し、読むことは本質的には読み手が自己のコードに従って分節することであり、同じ対象を読む場合であってもコード次第で読み取られる意味は変化することや、コードは読み手が自己を取り巻くコンテキストの中で日々無意識のうちに作り上げる価値観にほかならないことを学ぶ。第4段階では読み手自身の価値観を主題として取り上げて、メディアテキストの価値や信頼性を批判的に読

解するためには自己の価値観に対する批判的な視座を持つことが最重要であることを学ぶ。

これらは情報教育の文脈における記号論の入門教育の一例を示すものである。いずれの例も情報教育の一分野としてのメディア・リテラシーにおける「情報の価値や信頼性を批判的に判断し吟味するための読解力を身に付ける」という明確な教育目標のために考えられたものである。そのために“人文科学分野の専門家教育の入門編”として記号論を学ぶ場合よりも学習内容が大幅に簡略化され、かつ学習順序が“段階”として明確化されている点に特徴がある。したがってソシュールなどの人物に則した学説史や構造主義以降の現代思想との関係性など、人文科学分野の入門教育において欠かせない内容には一切触れていない。しかし読む行為の能動的側面や意味と価値観との不可分性など、学び手が客観主義的前提を自ら乗り越える上で本質的に重要と考えられる内容はすべて含まれている。

### 5. 日本教育大学院大学における教育実践

#### 5.1 メディア教育特論における記号論教育の目的

筆者は現在教員養成を目的とする日本教育大学院大学において記号論を扱う授業（教科名「メディア教育特論」、通年4単位）を担当している。昨年度は2名の学生に対して筆者の出版した入門書[6]を教科書として用いながら記号論の教育を行った。今年度は3名の学生に対して同様の授業を実践中である。

この授業の目的は以下の2点である。

(1) 記号という考え方を媒介にして情報やコミュニケーションの仕組みを再解釈すること

(2) 再解釈によって得られた情報観、コミュニケーション観を手がかりにして、メディアからの情報に対する批判的な読解力を実践的に身につけること

#### 5.2 授業計画と授業手法

授業計画は上記の目的に呼応する形で作成されている。すなわち前期（春学期）では主に(1)を念頭に置き、記号論の基本的な考え方を学ぶことを最優先する（入門書[6]の1、2章）。後期（秋学期）では(2)を念頭に置き、メディアテキストの実例を用いながら読解の演習を中心に授業を進める（入門書[6]の3～5章）。

授業の手法は主に教科書を中心とする文献の読解と質疑応答、筆者からの発問を中心とするディスカッション、実際のメディアテキストを使った読解演習の3点に集約される。たいていの場合、1回の授業の中でこの3点を適宜織り交ぜながら授業を構成する。

### 5.3 授業運営における留意点

授業運営に関しては出席者が少人数であることのメリットを生かすためにできる限りの柔軟性を持たせている。ここでいう少人数のメリットとは、筆者が出席者個々の反応をその場で子細に感じられることであり、また反応に応じて必要な処置を柔軟に取れることである。これらのメリットは記号論の学びにおいて不可欠な対話的な授業の実現に大きく資するものである。

対話的な授業を実現する上で筆者は特に2つの点に留意している。一つは学生に具体化・抽象化を促す発問を頻繁に投げかけること、もう一つは学生からの持ち込みのメディアテキストを積極的に読解の題材として用いることである。

前者に関しては、記号論の学びをタームの表面的な理解に終わらせず、言語や情報に対する新たな認識方法、すなわち“素朴な客観主義”を超えた関係論的、非実体的な言語・情報観の獲得へと結びつけるための配慮である。そのためには、教師は単にタームの解説をするだけでなく、学生が自己の理解を再構成するための手助けをすることが要求される。そこで筆者は教室においてしばしば「身近な具体例を挙げて」「それは要するにどうということ？」といったごく単純な発問を個々の出席者に執拗に投げかける。

後者は授業に時代性や生活世界のリアリティーを導入するための配慮である。学生に物事から読み取る意味が無意識のうちに特定の価値観やコンテキストの制約を受けていることを実感させるためには、教科書を離れて現実のメディアテキストと向かい合い、学生と教師とを交えて分析し合うことが効果的である。その際に用いるメディアテキストは、学生自身の価値観やコンテキストを問う以上、彼/彼女らの“いま”，すなわち時代性や生活世界にとってリアリティーのあるものでなければならぬ。その意味において、読解の題材はすべてを教師が準備するのではなく、むしろ学生側から気になる対象を持ち寄らせることが望ましい。

### 5.4 学生の反応

昨年度に出席した2名のうち1名の学生からは、授業の最終回を終えた後で「今までと物の見方が変わった」という声をもらった。その学生の話からは、特に記号論が内包する“言葉が世界を創り出す”という考え方に触れた点がそのような感想をもたらしたと推測される。この“言葉が世界を創り出す”という考え方は、学習者が客観世界の実在を前提とする“素朴な言語観”を持っていた場合、世界観の大きな変更のきっかけとなりうるものである。なぜなら客観主義的な前提に立つ場合には、世界は言葉の有無にかかわらず存

在するものであり、言葉が“世界を創り出す”という発想は生まれ得ないからである。このような発想を体感的に理解することは、構成主義的な学習観における知識の生成と言語との関係を理解する上で必ず役立つはずである。

## 6. まとめ

本論では教師教育における記号論の重要性について議論を行った。周知の通り、2003年のPISA (Programme for International Student Assessment) の結果がセンセーショナルに伝えられて以来、わが国の教育現場では総合学習に代表される新しい教育形態の模索と伝統的な教育形態への反動的回帰の間で揺れ動いている。しかしいかなる教育の方法論を取るにせよ、それを運用する教師自身がその根底にある学習観ないしは教育観、言い換えるならば“教育の哲学”を理解しなければ本来の教育効果は望めない。本論で取り上げた記号論は、教師教育の中で、特に構成主義に代表される新しい教育の潮流の根底にある哲学を理解するための入り口として機能するものと確信する。またそのことによって、記号論は従来の教養主義的知識から、新しい教師に求められる知的基盤を形作る重要なパーツとして新しい役割が付与されるであろう。

## 参考文献

- 1) 久保田賢一、構成主義が投げかける新しい教育 <http://www.res.kutc.kansai-u.ac.jp/~kubota/write/CIEC03ver4.pdf>
- 2) 池上嘉彦、記号論への招待、岩波新書、1984。
- 3) 丸山圭三郎、ソシュールを読む、岩波セミナーブックス、1983。
- 4) ウンベルト・エコ著、谷口伊兵衛訳、記号論入門—記号概念の歴史と分析、而立書房、1997。
- 5) 斎藤俊則、メディア・リテラシー（情報がひらく新しい世界9）、共立出版、2002。
- 6) 斎藤俊則、大岩元、情報教育の観点から見たメディア・リテラシーの必要性とその教育内容、情報処理学会論文誌、Vol.45, No.12, pp2856-2868, 2004。